太原市日中友好生態林造林事業報告（二年次）

国際善隣協会 国際交流委員会

当協会は、中国およびその他の近隣諸国との相互理解・親善友好の増進に寄与する活動と会員相互の研鑽・親睦を目的として国際交流事業を推進してきた。これまで、ＪＩＣＡ（独立行政法人国際協力機構）やＪＳＴ（国立研究開発法人科学技術振興機構）などの事業受託や、外務省系の助成事業を獲得し、その他日中緑化交流基金、緑の募金など資金源も多様化し、それに合わせて事業も増加した。例えば青少年招聘・交流事業やシニア・ボランティアグループ派遣事業、日中知的交流事業や植林事業を行ってきた（『善隣』２０２２年10月参照）。

２０２１年度には（公財）日中友好会館の「日中植林・植樹国際連帯事業」の助成事業により、山西省関帝山国有林管理局をカウンターパートとして、太原市日中友好生態林造林事業の一年次植林事業を実施した。この年には、同市古交市内の周山荘村の山野10㌶に、油松、山桃、遼東ナラ１万６５００株を植栽した。

二年次事業では植林場所を同市提子頭村に移し、同様の植栽規模で１ムー（約０・０６７㌶）あたり１１０本の植林密度で山間斜面に等高の帯状に植栽した。これに加えて、２０２３年10月にはボランティア５名が派遣され、共同植樹事業を行った（**別稿①**で詳細報告）。本植林事業において、根付け後の保育は３か年を基本として、カウンターパートが管理することになっている。

本事業の成果として、提子頭村の山間斜面への植林の実績は一年次とほぼ同数となり、これは山西省関帝山国有林管理局が２０２０年から３か年計画で造林地に指定した１万３８８６㌶の０・07パーセントに当たる。

当協会のカウンターパートとなった屯蘭川林場が太原市古交市岔口郷に設けられたのは１９６２年であるが、その後、山西省関帝山国有林管理局の管轄に組み込まれた。域内には今回の提子頭村を含めて27の行政村がある。２０２１年度に実施済みの周山荘村と２０２４年に実施予定の関頭村を含めると合計で30㌶の造林を当協会とカウンターパートで担うことになり、これは実施済み・予定を併せて０・21パーセントに相当する。

しかし造林事業全体を俯瞰するならば、まだまだ多くの植林予定地が残って

2021年 周山荘村、植栽後（南面）

2021年 周山荘村、植栽前（南面）

2023年４月 提子頭村 植栽前（東面）

おり、その造林予定面積は南北15・８km、東西44・６kmに及んでいる。そのうえ、山中には傾斜地と平坦地が混在し、中央には屯蘭川が流れていて、その両側に沢の形状の土地もある。こうした状況を鑑みると、この地域の自然環境の改善には、さらに多くの年月と困難が伴うことは疑いのないところである。しかしながら、その困難の先に待っている「汾河の水源の涵養、住民の生活および産業の一層の発展」という大いなるゴールに目をとめるならば、この造林事業はまさに国際的に推進されているSDGs（Sus-tainable Development Goals）の

2024年３月下旬 灌水２回目（油松、北面）

2023年８月下旬 植付け（油松、北東面）

実践と言えるだろう。

さて、二年次（２０２２年度）の２０２３年12月25日には山西省訪日団が当協会を訪れ、カウンターパートによる事業報告および交流会談を行った（**別稿②**で詳細報告）。

その後の視察と交流事業は、26日より29日に至る４日間の日程で組まれた。訪問先は都内にある林野庁計画課海外林業協力室、東京都農林総合研究センター研究企画室緑化森林科、埼玉県内の神川町地域振興課神泉総合支所、埼玉県環境科学国際センター研究企画室、京都府内の京都府農林水産部林業振興課の５か所であり、研修の実施を含めてそれぞれの代表者および担当者との会談形式で交流が行われた。

埼玉県神川町地域振興課神泉総合支所による現地案内スナップ

東京都農林総合研究センターでの意見交換会スナップ

国際交流委員会は、この全日程の訪問先への連絡・調整や通訳・補助業務ボランティアのアテンド派遣を担った。また、当協会正会員およびボランティア計11名が山西省訪日団の旅程に同行し、さまざまな日常的なサポートに当たった（**別稿③**で一部詳細報告）。

（文責・八島継男／小野寺悠子）

別稿①２０２３年10月24日～31日 ――訪中ボランティア旅行報告

２０２３年度の国際善隣協会の国際交流事業内のボランティア派遣事業は、10月24日から31日までの日程で、中国の山西省太原市と北京市を訪問するものであった。筆者は歴史学を専攻し、近代における東アジア諸国間の関係や交流を研究している学徒として、ボランティア派遣事業に参加した体験を報告する。

1．太原の旅10月25日～27日

10月24日、筆者は５年ぶりに中国大陸の土を踏んだ。真っ赤な夕日が照りつける北京首都国際空港に単身で降り立ち、到着ロビーにおいて先に到着していた訪中視察団長の姜晋如氏と合流し、タクシーで北京市豊台区のホテルに向かった。ホテルでは、他の団員である村瀬廣氏、牛木久雄氏、村田嘉明氏が待ち構えており、筆者の到着でようやく全員が顔を合わせることがで

き、その日の夕食後には睡魔に襲われて床に就くのみであった。

翌25日は、早朝から北京豊台駅に向かい、高速鉄道で3時間かけて太原南駅まで移動した。ここから山西省太原市への旅が始まることに、筆者の胸は弾んでいた。

山西省の省都である太原市は、東側が太行山脈、北側と西側を呂梁山脈という1500～2000m級の山々に囲まれた盆地に位置する都市であり、市内の中心には黄河の支流である汾河が豊かな水をたたえて南北に流れている。歴史的にこの地域は、中原と北京が位置する河北平原を結ぶ中継地として繁栄し、春秋時代の晋が都を置いたほか、李淵が唐を建国する際の拠点となった地としてよく知られている。辛亥革命以降では、中国最大の産炭地である山西省の山々を産地として製鉄・機械工業を盛んにした反面、森林破壊と土壌侵食によって河川氾濫や環境汚染に悩まされ続けてきた。そのため、現在は特に環境問題に積極的に取り組む都市の一つとなっている。

訪中視察事業は、カウンターパートである山西省関帝山国有林管理局の方々が、我々一行を太原南駅に出迎えることから始まった。マイクロバスでホテルに向かう道中には、車窓から市街の様相を眺めることができ、時折目に映る街路樹や公園の木々が青々と繁るその様は、まさしく自然共生であった。太原市内の緑化は、2000年代初頭から本格的に推進され、2010年には「国家園林都市」にも指定されたとのことである。街路樹の大半を占める銀杏は、視察期間には黄色に色づいて秋の見頃を迎えていた。

その日の夜、ホテルでは歓迎会が催された。山西省林業・草原局副局長の岳奎慶氏と日本側団長の姜晋如氏の挨拶がまず行われ、次いで記念品が交換された。中国側の記念品は、山西博物院所蔵の遺物「晋侯鳥尊」のレプリカであった。歓迎会が終わると、中国側は珍しい山西料理の晩餐の席に我々一行を案内し、一同で中国本場の大円卓を囲むこととなった。その宴席は常に談笑に沸き、筆者は当地の名酒・汾酒の芳しい香りに酔い、彼らの温かい歓迎の心を大いに感じることができた。

26日は、太原市の県級市である古交市岔口郷に位置する造林地へ向かった。市街から呂梁山脈の山あいにある造林地へ差し掛かると、緑豊かな森林から突如としてむき出しの黄土に灌木が散在する土地へとその景観が変化していった。

共同植樹を予定している地帯に到着した一行は、山西省関帝山国有林管理局屯蘭川林場の事務所に案内され、その会議室において場長の閆斌氏から、2021年度から実施されてきた造林事業の報告を受けた。座学の後は、四輪駆動の車に分乗して険しい山道を登り、まずは提子頭村の造林地の視察に向かった。提子頭村は、2023年度の造林が実施されている区画であり、油松、山桃、遼東ナラなどの樹木が南側の斜面に2mほどの等間隔の円心で10㌶植えられていた。造林地が見渡される高台には、「中日合作太原市中日友好生態林造林項目紀念牌　日本国際善隣協会　山西省林業和草原局　山西省関帝山国有林管理局　承建」と記された金属製プ

レート（**左写真**）が添えられていた。

視察団一行は、高台から全体的な造林状況を眺めた後、山道の下にある斜面まで下り、共同植樹作業を実施した。その作業は、50㎝ほどの穴に油松の苗を植えるという単純なものである。しかしながら、一見単純に思えるこの作業がなかなかどうしてかなりの重労働であった。その過程は、穴に落とした苗の上にシャベルで土を被せ、さらにその後に水をかけるというものである。日本側と中国側の人々の思いが込められたこの重労働作業によって、10ほどの苗を共同で植えることができた。共同作業が終わると、一同は事務所に戻って昼食を兼ねた交流

座談会を行った。午後には、２０２１年度の造林地である周山荘村の造林地を麓から視察し、その日の造林地共同作業（**左写真**）と視察を終えた。

太原の残りの旅では、晋の祖・唐叔虞やその母・邑姜を祀った晋祠公園を散策し、世界遺産である平遥古城（晋中市平遥県）を訪問した。平遥古城は、明代築造の城郭都市であり、山西商人の活動拠点でもあった。太原の旅では、共同植樹や造林地の視察における中国側の方々との親睦を通してその土地に生きる人々の人柄を知り、山々に囲まれた地形のために歴史的文物を多く残す山西の風土を大いに体感することができた。

2．北京の旅10月28日～31日

28日、一行は太原南駅から再び高速鉄道に乗車して北京豊台駅に戻った。一行の目的は、北京市にある蟒山国家森林公園の視察である。

蟒山国家森林公園は、北京市北部の北京市昌平区に位置し、その規模は２００㌶にわたっている。明の十三陵（永楽帝以降の歴代皇帝陵）があるところとして歴史的に有名である。この場所を訪れた理由の一つは、「鄧小平植樹処」の視察である。園長の侯麗娜氏が快く園内を案内してくれ、「鄧小平植樹処」では鄧小平の事績を説明してくれた。彼は80年代に政権を握り改革開放政策を推進する一方、森林造成にも注力し、１９８３年にここで直接シロカワマツを植えたとのことである。

その地帯から少し遊歩道を歩いていくと、もう一つの重要な視察対象である「北京中日民間友誼林」と朱書きされた石碑を見つけることができた（**次頁写真**）。

この石碑は、小渕恵三首相が１９９９年に訪中した際の構想を土台に設立された日中民間緑化協力委員

会・日中緑化交流基金（通称「小渕基金」、２０２１年３月に終了）の助成を受けて、当協会が中国側の協力のもと蟒山国家森林公園の一角に造成した「中日民間友誼林」を記念するものである。その裏に刻まれた碑文を少し丁寧に翻訳する。

生態との調和は、民生が求めるところである。北京環境保護基金会・北京緑化基金会と日本国際善隣協会が主導し、中日民間緑化協力委員会が資金援助をし、北京蟒山国家森林公園が資金補充・事業受注をすることで、昌平関溝地区に「中日民間友誼林」が造営・建設された。２００６年より２０１１年に至る５年の間、コノテガシワ・ハゼノキ・シロカワマツなどが１００㌶にわたり植栽される。事業の実施にあたり、日本友好人士八島継男先生と中日の環境保護ボランティアから多大な支援を得ている。この公益にかなう徳行が中日両国人民の友誼を増進し、民間の生態建設に関わる協力と交流を発展させることに対し、大いなる勢いを加えるべく、記念碑をたて永久に記念するものとする。

北京環境保護基金会　北京緑化基金会

西暦２００８年７月

碑文に名前の刻まれている当協会顧問八島継男氏が２００７年４月に植樹された苗が、今では豊かな森林に成長している光景も目撃できた。

その他の北京の旅では、故宮、八達嶺長城、頤和園、碧雲寺などを巡った。１９２５年に死去した孫文の柩が安置されていた碧雲寺には、孫文と親交が厚かった日本人・梅屋庄吉が訪問しており、当地では当時撮影された写真を見ることができた。

筆者にとって訪中視察団への参加は、日中交流の歴史に思いを馳せつつ、中国の現代までの歴史と思想の大きな流れを体感できる良い機会であった。寝食を共にした訪中視察団団員の皆様、ホテルや移動手段を手配し全行程を同行してくださった張和伏氏、参加を許可してくださった国際善隣協会国際交流委員会と関係者の皆様に対し、深くお礼申し上げる次第である。

（文責・東京大学大学院　岡部柊太）

別稿②２０２３年12月25日
――国際善隣会館での交流会

２０２３年12月25日、山西省造林訪日団６名が本協会を訪れた。この訪問は本協会と山西省関帝山国有林管理局との「日中友好造林緑化交流共同事業」協議書に基づく友好訪問旅行の第１日目の行程である。

本協会藤沼弘一会長（当時）は、歓迎の辞のなかで、まず２０２３年８月と10月に本協会の事業遂行担当者と訪中団が太原市を訪れた折、本協会の植林活動や視察訪問に対して温かい歓迎

を受けたことに感謝し、今回の訪日団の視察旅行についても実り多いものになるようにと祈念された。

次に訪日団の岳奎慶団長（山西省林業・草原局副局長）が挨拶にたたれ、90年代から継続して行われてきた山西省と日本の植林関係官庁および市民団体との植林に係る共同プロジェクトの成果を紹介した後、本協会とも継続的な交流と相互理解を深めて共に発展していくことを切に望むと述べられた。

続いて双方の間で記念品交換が行われた。本協会からは「日本 国際善隣協会」名入りの漆器飾皿と団員各人への山中塗写真立てが贈られ、訪日団からは式典参加者全員へ中国伝統工芸・剪紙の額が贈られた（**左上写真**）。剪紙「竹報平安」は「竹（手紙を書く竹簡）が平和を知らせてくる」を表す吉祥四字句である。

その後、昨年度の植林事業の実態が閆斌団員（山西省関帝山国有林管理局屯蘭川林場場長）により報告された。詳細で専門性の高い内容であったが、豊富な現場写真がスライド提示されていたため、素人の参列者でも興味深く拝聴できた。

記念撮影と竹前栄男事務局長からの閉会宣言を終え、最後は場所を会館内談話室、料亭（自費参加）へ移して貴重な交流の時間を共にした。

（文責・大瀧幸子）

別稿③2023年12月27日～29日
――訪日視察団同行記

1．12月27日（水）

朝6時に有楽町でチャーターバスに乗りこみ、1日の行程が始まった。来日3日目を迎えた訪日団メンバーは皆元気そうで安心した。国際交流委員会から派遣されたアテンダント3名も同行した。

最初の訪問地は埼玉県神川町である。幸いにも、運転手さんの尽力で定刻の8時半に到着することができた。櫻澤晃町長から挨拶を受け、記念撮影をした。その後、埼玉県中央部森林組合の黒澤博専務理事から地元の林業について説明を受けた。とりわけ、苗木を植えるときに使うドリルの解説は非常に印象に残った。例えば、ドリルの先端部分は黒澤氏の手作りであり、コンテナにある縦溝が根の過度な回転を防ぐことができるそうだ。その後、伐採後の株や所有地を示すGPSに加え、苗木の温室なども見学した。ドリルの現物を見たかったが、貸し出し中とのことでかなわず残念であった。

午後の見学先は、埼玉県環境科学国際センターである。埼玉県は山西省とは友好関係にある県で、長年にわたって交流を重ねてきた。技術交流、共同研究、研修、派遣などさまざまである。米持真一研究推進室副室長から挨拶を受けた後、中国人研究者の王効挙氏が

パワーポイントを使い、多彩な交流実績を紹介してくれた。その後、環境教育用の施設、生態園を見学した。

5時半過ぎに東京駅に着いた後、皆で味噌ラーメンを食べた。その後アテンダント全員が、新幹線で京都へ向かう私たちを改札口で見送ってくれた。

新幹線は9時ちょうどに京都駅に到着した。訪日団はすぐ駅近くのヨドバシカメラへ向かい、シェーバーなどを購入した。買い物を終え、ホテルにチェックインした。

2. 12月28日（木）

この日は京都市内での視察と観光を予定していた。8時半には中国でも有名な清水寺に到着した。彼らは興味津々で境内を見学して回った。短い観光の後、京都府農林水産部へ向かった。

予定の10時半より早く到着したため、別館にある一般公開されている指令センターも見学した。

10時半前に京都府農林水産部へ向かうと、農林水産部林業振興課の二人の職員が待っていた。農林水産部のある洋館は年月の重みを感じさせる建物で、百年以上の歴史があるそうだ。

会議室に入ると、塚脇健課長が挨拶に立ち、その後退室された。課長兼係長の三好林太郎氏、副主査の稲本佳孝氏の二方が残り、主に稲本氏が京都府の林業状況、木材産業などを紹介してくださった。二人は終始丁寧に応対され、資料の用意も周到であった。

12時半に会議室を出て、門の前で記念写真を撮った（**右写真**）。

昼食はブライトンホテルの「蛍」という京懐石のお店の個室でとった。一人8500円もする高級料理で美味しかった。その後二条城、金閣寺を見学した。

京都駅に到着後、駅構内で駅弁を買い、新幹線に乗り9時に東京駅についた。訪日団は荷物をホテルに置くと有楽町のビックカメラに買い物に出かけた。

3. 12月29日（金）

この日は訪日団の帰国日で、予定は観光だけである。まず、増上寺に向かい、本殿および徳川一族の墓所を見て回った。9時過ぎに東京タワーに着くとすぐ入場券を買い、皆で最上階までエレベータで登った。よく晴れた日で、富士山が見えた。

横浜で昼食をとると、訪日団はホテルに戻る途中、再び有楽町のビックカメラで買い物をした。彼らはホテルで荷造りし、空港到着後に再度梱包しなおして、グループでチェックインした。

その後、保安検査の入口まで見送った私に、彼らは無事に搭乗したこと、北京に到着したことを知らせてきてくれた。

（文責・姜晋如）

＊文中の写真は訪中団員ならびにカウンターパートによる撮影